



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	活動型の授業を「軸」としたカリキュラム改善の試み
Author(s)	白石, 麻子; 荒木, 華英
Citation	文化外国語専門学校紀要 26 (2014) pp.1-29
Issue Date	2014-02
URL	http://hdl.handle.net/10457/2069
Rights	

活動型の授業を「軸」とした カリキュラム改善の試み

日本語科 専任教授 白石 麻子

日本語科 専任講師 荒木 華英

・要旨

初級の段階から活動型の授業を計画的に組み入れることにより、カリキュラムの中にメインテキストの他にもう一つの「軸」を意識して1年間の指導を行った。活動型の授業の実践を積み重ねる中で、それぞれの学習者の発表する力が伸びるとともに、教師主導の授業の中では現れにくい学習者同士のインタラクションも増え、クラスの中に互いに対する理解や異文化に対する理解が深まった。授業は教師だけが作るものではなく、学習者と教師が一緒になって作っていくものであろう。本稿では、1年間の実践について報告し、これからの課題を考えてみたい。

・キーワード

活動型の授業 「軸」 発表 学習者同士 インタラクション

1. 本校の初級から中級にかけてのカリキュラムの現状

本校では、数名の教師がチームティーチングでそれぞれのレベルのクラスの授業を行っている。1日5コマ(1コマは50分)で、1コマごとに授業を担当する教師が替わる。それぞれのレベルで決められたメインテキストにしたがって文型や表現、本文などの授業を中心に行う他、様々な副教材を使用して四技能を伸ばす。初級から中級にかけては、おおよそ次のような内容をカリキュラムに組み込んでいる。

初級では『文化初級日本語Ⅰ テキスト 改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト 改訂版』をメインテキストとし、通常は副教材として『楽しく聞こう』『楽しく読もう』『楽しく話そう』の各テキストの内容を抜粋して使用する。また週3～4コマ程度の漢字の授業の他、自主作成教材を使った各技能を伸ばすための授業、さらに練習問題集などのFB(フィードバック)の授業、各課のテストなどを行う。

中級に進むと『文化中級日本語Ⅰ』、その後、『文化中級日本語Ⅱ』をメインテキストとして使用する。副教材としてはメインテキストの課のトピックに関連した活動、文型作文や復習会話、クイズなどの自主作成教材の授業を行う。初級の時と同様、漢字や練習問題集などのFBの授業もある。漢字の授業は中級の間は通常週2～3コマ程度行われる。中

級では、これらの他に市販の技能教材を使って授業を行う場合もある。

また、9月から12月の始めまでは、どのレベルでも、日本語能力試験対策の授業にある程度の時間が割かれる。レベルによって週3コマ程度から、週5コマ程度まで様々である。4月期初級ゼロスタート以外のクラスでは、11月の文化祭のスピーチ大会に向けてスピーチ指導の授業も行われる。

このように、大枠としてのカリキュラムは学校全体で決まっているが、各レベルのスケジュールは、毎年その年の学習者に合わせて各レベル1名のスケジュール担当の教師が作成することになっている。スケジュール作成にあたっては、年度初めにそのクラスの大まかな進度を含め、目指す方向性について、そのクラスの授業を担当する教師が適宜必要な話し合いを行う。メインテキストの進め方については、どの時間にどの項目を教えるかという「コマ割」に従って授業を行うので、どのスケジュール担当者がスケジュールを立ててもそれほど大きな差は生じない。また、それぞれのメインテキスト学習時に行う漢字や作文関係の教材も、いくつかの自主作成教材の中からそのクラスに合ったものを選択する機会が多いので、これも標準的な流れがあると言える。

初級から中級にかけてはごく大まかに言うと、1日5コマの授業のうち3コマ前後がメインテキストの授業内容に当てられ、1コマ強がメインテキストに関連した副教材やFB、テストなどの時間に当てられることが多いので、年によってあるいはスケジュール担当者によってカリキュラムの内容にそれほど大きな違いが出ることはない。しかし、それでもなお作成されたスケジュールには、そのグループの教師やスケジュール担当者の考え方や価値観がかなり反映される。1日5コマのうちメインテキストやそれに関連した副教材以外のために使える時間、週にすると3コマ前後の時間の積み重ねの中でどのような内容の授業を行うのか、学習者に習得させたい力を伸ばすためにどのような方法をとるかは、その年々のグループの授業担当の教師の裁量に任されている。

2. カリキュラムに対する問題意識

私たちは、今回の実践を行ったクラスを担当する以前に、異なるグループで授業を担当してきた。その中で、それぞれに感じていた問題意識がある。

筆者の一人は、初級から中級レベルに進むクラスのカリキュラムを考える際に次のような2つの問題意識を持っていた。1つ目は、授業のかなりの部分が教師から学習者へという教師主導で行われるものであるということについてである。特に初級の間、メインテキストの授業では教師が学習者に文法や表現などの知識を与え、学習者がそれを練習して覚えていく形のものが多くなる。もちろん、教師は学習者が自分のことや本当のことを表現する時間が持てるように授業を組み立てる努力をしている。しかし、学習者が自分のこと、本当のことを表現すると言っても、それはその時間の文型や表現を使ってのものに、ほぼ限られてしまう。また、技能教材である読解、聴解、漢字の授業においても、教師主導で

授業が進められることが多い。会話や作文はある程度学習者が発信する部分が多くなるが、それでも最終的には間違いを直して正しい表現を示し、それを覚えて言ったり書いたりするという流れになることが多い。問題意識の2つ目はメインテキストに関連した授業以外の部分、すなわち1日5コマの授業のうちある程度自由に裁量できる時間、週にして3コマ前後の内容をどのように組み立てていくかという点において、1年を通したしっかりとした「軸」が十分に考えられてこなかったのではないかということである。多くの場合、この時間を使って、会話力や聴解力、語彙力などを伸ばすための授業が組み込まれてきた。しかし、例えば、会話力をつけるためにある教材を使って授業を行い、表現を練習して覚えさせたり、ロールプレイをさせたり、あるいは自由会話をさせたりすることの最終的な目標は何なのだろうか。聴解力を伸ばすために聴解教材を使って授業を行い、学習者が様々な内容を聞き取れるようになった結果、何ができるようになることが最終目標なのだろうか。そのように考えた時、この時間をどのように使い、どのような力を伸ばしていくかを総合的に考えた1年の「軸」をしっかりとイメージすることが必要ではないかと思われた。そして、そのような「軸」となるものは「練習のための練習」ではなく「自分が言いたいこと、本当のことを表現し発信し合い、それを互いに理解することができるようになるための場としての授業」ではないかと考えた。そのような授業の中では、教師から学習者へという形ではないもの、すなわち、学習者から学習者へ、学習者から教師へ、あるいは場合によっては学習者から外の日本人へのというインタラクションが可能になるだろう。また、学習者が互いに影響しあい、学び合うことも可能になるだろう。このような考えから、具体的には今回のレベルのクラスでよく行われている聴解力、会話力、読解力、作文力などの技能の練習の時間をそれぞれ少し削り、その分計画的に段階を踏んで活動型の授業を取り入れていくことによって、1年間のカリキュラムの中にメインテキスト以外にもう一つの「軸」を作り出したいと考えた。

もう一人の筆者は、『文化中級日本語Ⅱ』をメインテキストとして学習するクラスでのいろいろな発表活動において、事前に発表原稿を読んで添削した教師であれば内容が理解できるが、他の学習者は理解できず、何のために誰のために発表しているのか、という発表にたびたび遭遇した。筆者は、発表などの活動を通して他の人にとって意味のある内容を伝えることや、内容について学習者同士でやりとりをすることはクラス内でできる本当のコミュニケーションであり、学習者の「伝える力」を伸ばすためにも必要なことではないかと考えていたが、当時は活動の形を十分に活かしていきれていないと感じており、なんとかしたいと思っていた。しかし、その頃の指導を振り返ってみると、発表と言っても学習者にまず作文を書かせ、教師が添削して絵などの視覚資料を準備するよう伝え、正しい日本語に直された作文を覚えて皆の前で話すという程度の指導しかしていなかった。それでもすばらしい発表をする学習者はいたが、それは学習者の素質によるもので、やり方次第ではより多くの学習者がよい発表ができるのではないかという疑問を持っていた。また、それぞれの活動が1回ずつ独立して行われており、毎回の発表が積み重なって上手になっていくとは感じられなかった。発表が上手な学習者は初めからずっと上手、下手な学習者は

最後までずっと下手、という印象であった。そして、そもそも何のために発表するのかという目的がはっきりしておらず、教師間でも教師と学生との間でも目標の共有ができていなかったことが根本的な問題ではないかを感じるようになった。そこで、スケジュール作成担当時には目標の共有と連続性を意識して、初級から少しずつ発表や活動の授業を入れるようにした。すると、学習者が思いがけない力を発揮したり、意外な一面を見せたり、新たなチームワークが生まれたりする場面が見られるようになり、普段のメインテキスト中心の授業やテストで得るのとは別の達成感を学習者も教師も得ることができるという手ごたえを感じていた。

筆者らはそれぞれこのような問題意識を持っていたのであるが、いつでも活動型の授業を「軸」としたコース運営ができるわけではない。入学時期やどのレベルからスタートするかによって、『文化中級日本語Ⅱ』学習時までカリキュラムに組み込むことのできる活動の量や内容が異なるからである。例えば、本校には4月入学の1年コースと10月入学の1年半コースがあるが、10月入学で初級ゼロスタートのクラスのほうが4月入学より、メインテキスト以外にも活動などを行う時間を多くとりやすい。初級のメインテキスト終了までにかかる時間は1年半コースのほうが若干長いからである。この他にもクラス編成上の都合、また、教師の担当レベルやスケジュール担当者も毎年変わるなどの理由で、試みたいと思ったことがすぐにできるとは限らなかった。今回は似たような考えを持った教師が時間的制約が比較的少ないレベルのクラスを共同で担当することになったことで、この実践を行うことができたと言える。

3. 先行研究および、私たちの「活動型の授業」

まず、私たちの活動型の授業とは何か、なぜ活動型の授業をするのかを整理することで、活動型の授業を1年間の「軸」として選んだ理由を述べたい。

日本語教育においてコミュニケーション能力の養成が重視されるようになって久しく、日本語学校においても学習者中心の活動型の授業が行われることは珍しくなくなっている。本校でも、初級では日本人への簡単なインタビューや、2つの店へ行っているいろいろなことを調べて発表する活動がよく行われており、中級以降は読解、聴解、作文、発話の4つの技能を総合的に練習するものとしての「活動」がメインテキストの中に含まれている。メインテキストのトピックに準拠したものとして、『文化中級日本語Ⅰ』学習時には「外国語学習の方法について考える」「敬語に関する日本人へのインタビュー」「美術館・博物館へ行って報告する」など、『文化中級日本語Ⅱ』学習時には「日本人へのインタビューと壁新聞作り」「国のことわざ紹介」「日本で見つけたこんな物」「ディベート」などがよく行われている。特に『文化中級日本語Ⅱ』の学習に入ってから活動が増える傾向にある。しかし、実際どのような活動が選択され、個々の活動がどのように進められるかはそのコースの担当者によるところが大きい。また、個々のレベルでの目標やレベルを越えたものも含めた縦の

つながりまで十分に考慮して行われているとは言い切れない。

私たちの活動型の授業とは、「学習者があるテーマについて日本語を使って考えたりコミュニケーションしたり行動したりして、何かを発信する授業」を指している。学習者の日本語コミュニケーション能力向上という面で、日本語クラスで活動型の授業を行うことは意義のあることだと私たちは考えている。もちろん私たちはメインテキストに基づいた授業においても、口頭練習にペア練習や学習者の本当のことを話せるような練習をできるだけ多く取り入れ、学習者のコミュニケーション能力がつくような授業を心がけている。しかし、それはやはりその時間のターゲットの文型や表現を使った範囲のものであり、教師によってコントロールされ、クラスの学習者全員に同様のアウトプットを求めるものが多い。学習者それぞれの個性や自由は制限されてしまう。一方、活動型の授業では、学習者にある程度選択の幅があり、個々の学習者が興味・関心を持ったことをテーマにできるため、内容に注意が向くことによって教室がリアルコミュニケーションの場となりやすい。さらに、教師のコントロールが少なくなるので、個々の学習者が自分のレベルや考え方に合わせて主体的に学習を進めることになる。これらの点からは、メインテキストに基づいた授業で常に教師にコントロールされているのとは異なった自由なインタラクションが増えることが予想される。また、活動型の授業は内容重視であり、使うと便利な文型や表現を教師が提示することはあるが、特定の文型や表現を使うこと自体が目的ではないため、学習者はそれまでに学んだ文法や語彙をフルに活用して実際に使うことが求められる。これらのことが、学習者の日本語でのコミュニケーション能力を向上させると考える。それに加え、学習者は最終的に日本語での発表や成果物の作成を成し遂げることによって自分の日本語力に自信を持つことができ、そのことは以後の彼らの積極的な日本語使用を促すことにもつながるだろう。

この活動型の授業は、「言語は何かをすることを通して結果的に学ばれる (learning by doing)」(岡崎・岡崎, 1990) というコミュニカティブ・アプローチの根本的な学習観に理論的背景を置くものである。このような言語学習観に基づくものには、従来より「プロジェクト・ワーク」という呼び方がされてきたものがある。プロジェクト・ワークは、バルダン田中他 (1988) によると「学習者が自分たちで話し合っって計画をたて、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果をもちよって1つの製作品 (報告書、発表、ビデオなど) にまとめる学習活動である。」と定義されている。活動全体の過程を重視するという面で、私たちの活動型の授業も趣旨は同じである。具体的には、自分の発表をするだけでなく他のクラスメートの発表を聞いて反応することや、発表原稿を書く時に自分の考えをなんとか日本語で表現しようと頭をひねることはもちろん、グループで新聞を書く時の役割分担をすること、発表の練習をペアで行って互いにアドバイスし合うことなど、何かの目的のために行われる作業をすべて日本語で行うことがまさに「何かを通して結果的に (日本語が) 学ばれる」ことであると考えられる。ただ、私たちの活動型の授業は「教室の外で」行うことに限らない。日本語学校では教室外で活動するためにクリアしなければならない事務的条件もあり、頻繁にそのような活動

を行うことはなかなか難しい。もし「教室の外で」行わなければならないと考えてしまうと、途端に活動の可能性の幅を狭めてしまう。そこで私たちは、教室の中であろうと外であろうと活動を行う過程で学習者が行う日本語での言語活動はすべて、コミュニケーション能力の向上のためには重要なものであると考え、外との接触だけではなく、学習者の内部から引き出せるものや学習者同士および教師と学習者のインタラクションなど、教室内でできることも大切にしたいと考えた。

しかし、プロジェクト・ワークや活動型の授業の実践報告は、初級レベルのものはそれほど多くなく（杉山他, 2003、岸, 2007 など）、ほとんどが中級レベルのものである。また、初級から始まり中級後半に達するクラスで縦断的に行われた例もあまり見当たらない。三浦（1998）は、大学院進学者の予備教育としての初級日本語コースでのプロジェクト・ワークの実践を報告しており、プロジェクト・ワークを行うことにより、学習者が「受信」して生きたものを消化・応用して、自分の言葉で話したり書いたりする「発信」を体験することができるとし、初級段階からこのような活動を行うことの意義を述べている。

初級レベルのクラスで活動型の授業を行うには、いろいろな点で難しさがある。まず、教師が活動の概要を説明するにも言葉だけでは理解が難しいので、絵や図表を用いた説明や教師の例の実演、ある程度のひな型の提示など、よりわかりやすくすることが必要である。それから、グループでの話し合いや口頭発表においては、学習者が言いたいことを日本語で十分に言えず、それが学習者の大きなストレスになることも考えられる。金城（1994）は、プロジェクト・ワークの実施においては「どこまで学習者に任せ、教師がどの程度関与していくのか、どの程度援助を与えるのか、どのぐらいの情報を提供するのかなどは、学習者の学習段階と年齢等の学習者が持つ性質に応じて変えていく工夫が必要である。」と述べているが、初級レベルでは特にきめ細かな工夫が必要だろう。「どこまで学習者に任せ、教師がどの程度関与していくのか、どの程度援助を与えるのか、どのぐらいの情報を提供するのか」の「さじ加減」は難しいことであるが、それをうまく見極めることさえできれば、初級段階でも十分に活動型の授業を行うことが可能であると言える。

また、本校の学習者はアジア系が多いためか教科書説明型の授業しか経験したことがない者も多く、活動型の授業を「初級なのにそんなことができるわけがない」と拒絶する者もいる。しかし、筆者らは過去の経験から、初級でも素晴らしい発表をする学習者はいるし、上級でも聞き手に伝わらない発表をする学習者がいること、ペーパーテストの点数がいい学習者が必ずしも上手に発表できるわけではないことを実感している。語彙や文型を覚えれば、自然に運用力がつくというものではないからだろう。そこで、初級からレベルに合わせた活動型の授業を少しずつ行い、簡単なことから難しいことへ段階的にレベルアップしていくことができれば、学習者に無理なく活動型の授業に慣れてもらうことができるだろうと考えた。

4. 活動型の授業の全体像

4-1. 対象クラス

対象となったクラスは、本校の2011年度5組で、『新文化初級日本語Ⅰ』⁽¹⁾の第14課（基本過去などの学習）からスタートしたクラスであった。4月当初、卒業までの見通しとして初級の学習を終了した後、『文化中級日本語Ⅰ』を学習し、さらに『文化中級日本語Ⅱ』の前半（第4課まで）+ α の学習を終えることが目標となった。クラスのメンバーが確定した4月初めの担当教師のミーティングでは、この+ α の時間にどのような授業を行うかは学習者の様子を見ながら決めていくことになっていたが、『文化中級日本語Ⅱ』の後半すなわち第5課～第8課を抜粋で行うことや、その他教師が適当だと判断した教材を扱う可能性が考えられた。スタート時の4月は東日本大震災の影響でクラスの人数が6名と少なく、その内訳は中国語話者が5名、韓国語話者が1名であった。5月になってさらに3名の中国語話者が加わり、9名となったが、同じ母語を使用する学習者の多いクラスであった。その後、9月、10月に数名のクラス移動があり、最終的には、台湾8名、韓国およびインドネシア各2名、モンゴル、ウズベキスタン、タイ各1名の合計15名のクラスになった。

4-2. 実施した活動型の授業の概要

1学期に行った主な活動型の授業は4つである。最初の「日本人にインタビューしよう」は4月の授業開始後4日目にスタートした。まだ日本に来て間もない時期であり、ほとんどの学習者は日本人と実際に話したことがなく、片言の日本語で話すことを恐れていたが、あえてこの時期に行うことで1年間の日本語学習の動機づけの役割を持たせた。この授業をスタートとして、次の表1のように2学期には5つ、3学期には4つの計13の活動型の授業を行った（それぞれの活動の詳細と、観察された学習者の様子などは資料を参照）。これらの活動や発表は、グループで行うもの、個人で行うもの、また2～3分で発表できるものから15分程度の時間を必要とするものまで様々な形式と長さのものをとり混ぜて行った。この表にあるもの以外にも小さな活動型授業（メインテキスト関連の「外国語学習の方法について考える」、「印象深い自己紹介」など）をいくつか行ったが、省略する。実施した活動型の授業で使用した教材は、本校の教師によってこれまでに作成されたものを対象学習者に合わせてアレンジしたもの、および今回新しく作成したものである。

表 1

テーマ	所要時間	期間
日本人にインタビューしよう	4コマ	4月18日～4月23日
〇〇さんを紹介します	2コマ+発表5回	5月10日～5月23日
どちらの店のほうがいいですか	4.5コマ+調査は宿題	5月25日～6月1日
ちょっとこれを見てください (3分間スピーチ)	0.5コマ+発表4回	6月15日～7月1日
街の中の敬語調べ	2コマ	9月14日・9月22日
クラス内スピーチ発表会	8コマ	9月16日～10月8日
美術館・博物館へ行って報告する	5コマ	10月27日～11月11日
こんなニュースがありました	3.5コマ	12月6日～12月12日
流行語・若者言葉調べ	1.5コマ+調査 発表5回	12月6日～12月13日
日本人へのインタビューと 壁新聞作り	7コマ+ インタビューは宿題	12月8日～1月20日
国のことわざ紹介	4コマ	1月27日～2月3日
健康・便利グッズ	4コマ	2月1日～2月13日
私の国のこんな物	7コマ	2月15日～2月24日

このように、ほぼ毎月1回、活動型の授業をカリキュラムに組み入れ、授業が終わるたびにその内容によって教師からのコメントやFB、クラスメートからのFB、自分の発表についての振り返りなどを行った他、発表した資料や作品をクラス内に掲示するなど学習者自身が自分たちの進歩を感じられるような環境を作り、次の活動への動機づけとなるようにした。

また、それぞれのメインテキストが終了した節目の時点で、それまでに行ってきた活動型の授業を振り返り、これから行う予定の活動の内容について簡単に知らせるプリントを作成して学習者に見せ、次に向かうべき目標を意識できるようにした。こうすることで、活動型の授業が年間を通して連続する、メインテキスト以外の1つの学習の「軸」として学習者に意識されるように努めた。

これらのうち、12月の初めに行った「流行語・若者言葉調べ」と、2月の中旬から下旬にかけて行った「私の国のこんな物」の2つの活動について次に述べる。

5. 実践報告

5-1. 実践報告1「流行語・若者言葉調べ」

5-1-1. 活動の目的

この活動の目的は次の3つである。①日頃耳にすることの多い流行語などの言葉について日本人にインタビューして調べ、5分以内で発表し、お互いに新しい情報を共有する。②これまでの活動型の授業の流れの一環として、今回は教師が、この活動で使用する言語形式や発表の方法についての指導などを一切行わず、学習者自身が4月から積み重ねてきた経験を生かして自分がよいと思う方法で準備し、発表する。③失敗もあるかもしれないが、その失敗や他のクラスメートの発表を通して、よりよい発表にするにはどうすればいいかを自分で考え、次回の発表に活かす。その方法として、他の学習者からのFBをもらうとともに、学習者自身が自分の発表についての振り返りも行う。

5-1-2. 活動の手順

この活動のための事前準備として、教師はしばらく前から、当時流行していた言葉や若者言葉を集めておいた。授業では、はじめに25分程度を使って導入とどの言葉をどの学習者が調べるかの担当を決めた。導入では、今回の活動の目的と流れを簡単に説明し、原稿などのチェックは行わないこと、発表のし方は自由であること、持ち時間は一人5分以内であることをプリントで学習者に見せて伝えた。その後、あらかじめ教師が準備しておいた言葉の一覧表を見せ、調べる言葉の分担を決めた。学習者の数は15名であったが、「ヘッドスパ」「すっぴん」「鉄男」「家飲み」「大人買い」「美白」「歴女」「テンパる」「廃墟ツアー」など48の言葉を準備し、その中で学習者の誰かが知っている言葉は除いて分担をした。その結果、「がっつり」「鉄男」「テッパン」「アラフォー」「女子会」「イクジイ」「ホットスポット」「テンパる」「フリーペーパー」「マンキツ」「断捨離」「フラゲ」「こち亀」「ハンパない」「ガチ」の15の言葉をそれぞれ調べてくることになった。分担後、教師が「メーリス」という言葉の発表のデモンストレーションをした。教師のデモンストレーションでは、絵や「メーリス」という言葉の入った短い会話を提示して、その言葉が使われる場面を示した。

5-1-3. 活動の実際

この活動では昼休みを含めた1時間半を使って、同じ学園内の日本人学生⁽²⁾にインタビューする時間を設けた。発表の準備は各自が放課後または家で行い、翌週、3～4人ずつ3回に分けて発表した。

発表は、「言葉で説明し、会話などで使い方の例を示す」「ホワイトボードなどを使って説明しながら発表する」「絵や写真、資料や文字情報などを実物投影機で写して発表する」「実物を持ってきて見せる」などさまざまな工夫が見られた。また、発表の際、インタビューしてきた言葉の説明をするだけでなく、インタビューの感想などを交えて発表する学習者も多かった。例えば、「断捨離」という言葉についてインタビューした学習者は、何人かの

日本人学生に聞いたが誰もその言葉を知らなかったため、学園内の書籍売り場へ行き書店の人に聞いてようやく意味がわかったと言いながらその言葉の意味を絵を描いて示し、雑誌やパンケースなどの不要になったものを見せながらクラスメートに説明した。また、「ホットスポット」という言葉についてインタビューした学習者は、カタカナの言葉なので何かおもしろい言葉かと思っていたが、インタビューをしてみて、それが原発震災による放射能汚染が高い場所であることを知った。その驚きとともに言葉の意味を図や絵を用いてクラスメートに伝えたところ、クラスメートも真剣に聞いていた。

5-1-4. アンケート結果

発表後、それぞれの発表者に「自分の発表について書いてください」というシートを配布し、自分の発表を振り返る時間を設けた。また、聞いていたクラスメートにも「〇〇さんの発表はどうでしたか」という評価シートを配布し、FBをしてもらった。それぞれの主な内容は次のとおりである。

自分の発表についての振り返りでは、今回の発表の方法と、発表の感想および次回の発表に向けての改善点を聞いた。発表の方法については、

口頭で説明し、その言葉を使った会話例などを見せた（9人）／絵や写真、資料などを準備しスクリーンに映して見せた（5人）／ホワイトボードに文字情報などを書いて説明した（3人）／実物を持ってきて見せた（2人）

となり、数名の学習者は複数の方法で発表していた。発表の感想および次回に向けての改善点としては、次のような記述が見られた。

説明が簡単すぎた／資料が少なくてわかりにくかったと思う／もっと絵や例を多くしたほうがよかった／緊張しないでゆっくり話したほうがいい／文法をもっと正しく使ったほうがいい／もっと大きい声で話したほうがいい／大きい声で話せるようになった

「大きい声で話せるようになった」という肯定的な評価を書いたのは、これまでの発表では自信がなく、どちらかというとな発表も苦手だった学習者であった。

次に、クラスメートからのFBの結果であるが、聞き手の70%以上が「とてもわかりやすい」と感じた発表には、その理由として自由記入欄に次のような記述が見られた。

実物を持ってきて説明したのでわかりやすかった／絵を使って説明したのでわかりやすかった／例がたくさんあってわかりやすかった／説明が詳しく、ゆっくり話したのでわかりやすかった／声が大きくてはっきり話したのでよかった／簡単な言葉を使って説明したのでよくわかった／十分準備して発表したのも、説明がよくわかった。笑顔で発表したのもよかった／字が大きくて見やすかった

一方「まあまあ」「ちょっとわからない」などの聞き手の反応が多かった発表には、その理由として、次のような記述が見られた。

その言葉を使う会話の例がなかった／発音がわかりにくかった／話すスピードが速すぎた／絵などがもっとほしい／説明が短すぎた／説明は詳しいが、声が小さいか

らよく聞こえなかった

今回の発表は、4月から取り組んできた活動・発表の一連の流れの中で初めて、使用する言語形式、インタビューのし方、見せる資料などについて教師のチェックを全く行わず、発表の方法も学習者にすべて任せたものであった。導入から発表までの間も週末を入れて最短で6日間しかなかったにもかかわらず、それぞれの学習者が聞き手を意識してわかりやすく興味を持ってもらえる発表になるよう努力したことが感じられ、これまでの活動や発表の積み重ねによる学習者の成長を実感した。また聞く立場としても、わかりやすい発表にするために必要なことが何かを的確にとらえることができるようになってきたことが、アンケート結果からも読み取れた。

5-2. 実践報告2「私の国のこんな物」

5-2-1. 活動実施の背景

本校では従来から、『文化中級日本語Ⅱ』第6課学習時に「日本で見つけたこんな物」というテーマで調査・発表をするという活動を行っている。これは、学習者が日本で目にして「あれは何だろう」と疑問に思った日本の縁起物や伝統的な道具などについて、主に百科事典やインターネット上の資料を読むという調査によって、その由来や使用方法などについて理解を深め、他の学習者に発表するという活動である。

しかし、4月に初級途中からスタートするクラスにおいては、中級に入っても特に気になっている日本的な物はないという学習者や、インターネット検索以外の方法で資料を探せない学習者、あるいは資料はインターネットですぐに探せても書いてある日本語が難しすぎて理解できないという学習者が多く、テーマの選択から資料の準備と読み込みまで教師主導で行わなくては活動が成り立たない状況が見られていた。これでは学習者中心という活動の本来の意義から離れてしまっていると考え、筆者の一人が担当した2009年度6、7組(この実践報告と同レベル)ではテーマを変えることにした。テーマを「私の国のこんな物」とし、学習者にとって身近でどんな物かよくわかっているものを題材に選ぶことにより、他の学習者や教師に自分の言葉で伝えることに主眼を置く活動を目指したのである。今回は2009年度の実践を2011年度5組に合わせてさらに見直し、授業を行った。

5-2-2. 活動の手順

2011年度5組での活動「私の国のこんな物」は、次のような手順で行った。

①活動の目的の説明とテーマ探しの予告

この発表がコース最後の発表となることを伝え、今まで行ってきたいろいろな発表の経験を活かして、聞いている人にわかりやすい発表をすることが目的であることを伝えた。メインテキストで出てきた「だるま」「こいのぼり」などのように、それぞれの国の縁起物やみんなに紹介したい便利な道具などはないか学習者に問いかけ、テーマを少し考えておくよう指示した。日本にも似たような物はあるが、少し使い方が異なるものや名前がおもしろい物などでもよいことも伝えた。

②教師の例とテーマ選びのポイント説明

教師の「私の国のこんな物」の発表を実際にやってみせ、学習者に発表のイメージをつかんでもらえるようにした。そして、テーマを選ぶ際には次のような内容で話せる物を選ぶように伝えた。

- a. 見た目の特徴
- b. 一般的な使い方（何をするための物か）
- c. 「私」の使い方
- d. それに関する自分の思い出
- e. 歴史
- f. 名前の由来
- g. バリエーション（種類）について
- h. 日本で見た同じような物について

今回教師は「こたつ」をテーマに選び、厚紙で作った模型を使いながら a、b、d、e（順不同）について発表した。

また、同じ国籍の学習者がクラスに複数在籍している場合は、テーマが重ならないように学習者同士で調整させた。最後にテーマとそれがどんな物か簡単に書くシートを配布し、次回までに提出するよう指示した。

③発表のアウトラインメモの作成

教師の例の原稿を示して発表の構成（イントロダクション→説明→まとめ）を確認した後、どの順番でどの内容を話すか、見せる物や自分がする動作などを学習者が個人で考えて、メモ形式でシートに書き込んでいった。その際、自分の頭の中の整理であり文章で書く必要はないことを示すため、教師のアウトラインメモも見せておいた。教師は机間巡視し、質問を受け付けたり、その場で適宜アドバイスをした。書き込んだシートは提出させ、教師が文法や言葉の誤りを添削した。構成に関してわかりにくい部分があれば、再考を促すコメントを添えた。

④発表原稿の作成

原稿を書く前に、原稿を書く際に使えるような表現を書いたプリントを配布して簡単に導入しておいた。それからアウトラインメモのシートを返却し、それに基づいて学習者個人で発表の原稿を書いた。アウトラインメモのシートの段階で意味が不明な部分があった学習者には、教師が意味を確認した。文章の横には、発表の際の動作や見せる資料などをメモさせ、発表の全体像がわかるようにした。原稿を書き終わったらもう一度自分の原稿を見直し、自分で直せる部分は直してから提出させ、教師が文法や言葉の添削をした。他の学習者にとってわかりにくいような言葉を使っている場合はマーカーで下線を引いておき、簡単な言葉への言い換えや説明の工夫を求めた。

⑤原稿リライトと発表時に使う資料作成

教師の添削の入った原稿を見て、もう一度原稿を書いた。1回目の原稿で教師が意味を理解できなかった部分は、学習者と話し合いながら適切な表現を見つけていった。原

稿を完成させた学習者は、資料作成に進んだ。

⑥発表練習

学習者個人で練習した後、あらかじめ教師が決めておいたペアの相手に発表し、ペアでわかりにくい点などをアドバイスし合った。発表資料がまだできていない場合でも、「この写真を見てください。これは～」などと言いながら、写真を見せるジェスチャーをして本番の発表のように行った。漢字圏学習者は母語にもある漢字の言葉をそのまま使いがちで、自分は意味がわかっても他の学習者が意味を知らない言葉を使っていることが多い。また、漢字圏非漢字圏問わず、文字で書いている時には問題なくても声に出すと発音が正しくないことがあり、相手に伝わらない場合も多い。そのため、相手の発表を聞いてわからない部分があったら質問しながら練習を進めていくように伝えた。

⑦発表会

あらかじめ発表の順番を決めておき、資料などを見せながら一人ずつ発表を行った。各発表が終わったら、聴衆である他の学習者や教師が質問する時間を設けた。また、すべての発表者について簡単な評価をシートに書いてもらった。評価シートは「内容はよくわかったか」「資料の見せ方はよかったか」「話し方」の3項目について「よくわかった」「まあまあ」「ちょっと」の3段階で評価し、自由に感想も書いてもらった。教師も同様の評価シートを書いた。発表はDVDで撮影し、後日自分の発表を見て振り返る時間も設けた。

5-2-3. 活動の実際

①テーマ決定とアウトライン作成

ほとんどの学習者がすんなりとテーマを決めることができ、簡単な日本語での説明も教師が理解できるものだった。同じ国籍の学習者間でもうまく調整が行われており、それぞれ違う物を選んでいった。今回学習者が選んだテーマは、「鞭炮（台湾の爆竹）」「健康棒（台湾の健康グッズ）」「ポテギ（韓国のおんぶひも）」「ジアラベ（台湾の占いの道具）」「布袋劇（台湾の人形劇）」「春聯（台湾の正月飾り）」「農民曆（台湾のカレンダー）」「破邪符（台湾の護符）」「ラジ（台湾のエコバッグ）」「ベシック（ウズベキスタンの子どものベッド）」「ワヤン（インドネシアの影絵）」「ゲル（モンゴルの家）」「ザントクテ（韓国の甕）」「アンクルン（インドネシアの楽器）」「タイの香り袋」であった。「布袋劇」を選んだ学習者には、今は「物」がテーマなので、「劇」は抽象的でテーマとして大きすぎて難しくないだろうかと問いかけたが、「布袋劇」の人形について説明するから大丈夫という答えだったので、そのままのテーマで進めることになった。

アウトラインメモの作成では、学習者それぞれで自分なりに工夫した記述方法が見られた。まず母語で全体像を書いてからキーワードを辞書で調べてメモする、矢印や吹き出しを使って視覚的にわかりやすく書く、資料を見せるタイミングの部分にマークを書く、発表の時にする動作の図を書く、などである。全部書いてから推敲し、話す順番を数字で振り直す学習者も見られた。しかし、中には、教師から見ると説明が少なくどん

な発表なのか内容が予想できないメモを書く学習者もいた。書くことを極度に苦手としている学習者で、内容は頭の中にあるから大丈夫ということだった。

②発表原稿の作成と発表準備

見せる資料やジェスチャーなどもメモした発表用の原稿を書くのは、この1つ前の活動「健康・便利グッズ」に続いて2回目であり、学習者は皆、集中して原稿作成に取り組んでいた。国の物がテーマだったためか、辞書でもわからない言葉などがあつたら同国の学習者に確認したり話し合ったりし、それでも解決できない場合は教師を呼んで日本語で説明して確認するという方法で書き進める学習者が多かった。①で述べた「布袋劇」をテーマにした学習者は、最終的な発表は「人形」についてではなく、やはり「劇」全体についてのものだったため、本人も原稿作成段階から苦労していた。原稿が完成した学習者は発表時に使う資料を準備して練習することになっていたが、実際の授業では準備と練習の時間を十分にとることができなかった。それにもかかわらず、多くの学習者は放課後などの時間を使って準備と練習を進めていたようである。発表で使う物(写真、模型、実物など)や見せ方(実演、寸劇など)は、教師は実際に発表を見るまで全く知らなかったものが多く、学習者が授業外の時間も使ってこの活動に取り組んでいたことがわかった。

③発表会と評価

皆それなりの分量がある原稿を書いていたが、うつむいて原稿を読んでいるだけという学習者はもはや存在せず、相手に聞いてほしい、伝えようという気持ちが伝わってくる発表会だった。聞き手に質問したり理解を確認したり何か動作をさせたりして、上手にコミュニケーションをとりながら発表を進める学習者も見られた。資料の見せ方についても、実際に物を持ってきて皆に手に取らせる、模型を作って見せるなどから、紹介した楽器の音をスマートフォンから流す(アンクルン)、ミニサイズの影絵の人形と舞台を準備して懐中電灯で映して見せる(ワヤン)、寸劇で言い伝えの物語を表現する(春聯)、実物はなくとも似ている物を使って伝統的な占いをやってみせる(ジアラベ)など、教師の予想を遥かに超える力の入ったものが多く、言葉での説明では足りない部分を十分補い視覚的聴覚的にも楽しめる発表になっていた。写真を見せるだけにしても、自分が実際に使った物の写真を見せて興味を引いたり、たくさんの写真に順番を書いて整理してスムーズに見せたりするなど、さすがにコース最後の発表だと感じさせる工夫が随所に見られた。また、普段の文法等の授業ではあまり成績がふるわない学習者も、堂々と自信を持った態度ですばらしい発表を行っていたことが印象的だった。授業終了時間を大幅に超えてしまったため最後のほうは少し集中力が切れている学習者もいたが、質問したり感想を言ったりしながら、最後まで楽しんで発表を聞くことができたようだ。

評価シートの感想(表2参照)は、発表のわかりやすさやおもしろさ(資料の見せ方、話し方)に関する言及が多かった。また、テーマの物(内容そのもの)に関する言及も多く、学習者が他の発表の内容にも興味を持って聞いていたことがうかがわれる。ここまでいろいろな発表を経験してきたことによって、聞き手にわかってもらえる発表、内容が楽

しめる発表がよい発表だというクラス内の共通認識ができていたと言えるのではないだろうか。一方、言語面でのコメントは少なかったが、その中ではマイナス評価のものが目立った。これは、発音や話すスピードがよくなかったために、聞き手が内容の理解ができなかった場合にかかれたコメントではないだろうか。逆に、発音やスピードに問題がなければ自然と発表の内容に注意が向き、わかりやすさや内容面へのコメントが書かれたのだろう。正しい発音やはっきりとした発音で話すことがわかりやすい発表の大前提にあり、そのための練習も活動の中では欠かせないものであると言えるだろう。

表2

「私の国のこんな物」発表 学習者から他の学習者への感想（自由記述 原文ママ）	
音声、文法に関する言及	<ul style="list-style-type: none"> ・声の大きさはよく聞こえますよ。よかったですと思ってます。 ・発音が大きいできれいでした。 ・声が低くて少しわかりにくかった。 ・発音がよくないし、はっきりくない。 ・発音もっと練習したらいいと思います。 ・スピードが速くて音がききにくいです。 ・もっと順調な話し方がいいと思います。 ・です・ます形使ってね～
発表のわかりやすさ（資料の見せ方、話し方）に関する言及	<ul style="list-style-type: none"> ・再演してくれてわかりやすかったです。 ・模型を使って再演してわかりやすかった。 ・写真を大いに準備してよかったです。 ・使い方は絵で説明したから、よくわかりました。 ・資料が多くてわかりやすかったです。 ・はっきり説明したり面白い話を言いたりしただけじゃなくて、美しい道具を作ったから本当にすばらしい。 ・写真をよく使ったので、わかりやすいです。 ・多い写真と絵で説明で素晴らしい紹介でした。 ・アクションはとてもおもしろかったです。 ・いい説明だと思います。すごくわかりやすいです。 ・内容よくわかりました。 ・とてもかわいいです。模型もとても上手に使っていました。 ・よくわかりやすい。 ・よくわかった。 ・よかったです。準備十分に充足です。 ・もっとみんなに話しかければよかったです。でも準備はいいと思います。 ・とても面白くて、わかりやすかった。〇〇さん、発表が上手ですね。 ・書いた漢字がわからないですが、いいと思います。 ・もっとみんなに向けて話しかければよかったです。でもだいたいよかったですと思います。 ・とても分かりやすく、見せるものもぴったりだと思います。本当によかったですと思います。

<p>発表のわかりやすさ（資料の見せ方、話し方）に関する言及</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・質問によく答えた。 ・彼女の声が好き。ゆっくり話したからよく分かった。 ・資料の見せ方がすごくいいです。 ・リラックス感じています。いいと思っています。 ・いいですね。〇〇（学習者の名前）の feel です。 ・質問をちゃんと教えてくれますから、よかったと思っています。 ・説明はとてもわかりやすいですよ。 ・本物で紹介したので、物の形と使い方すぐわかりました。 ・戯劇を通じて、わかりやすくなりました。 ・写真本当におもしろかった。 ・使い方は詳しく説明した。よくわかりました。 ・発表がとてもいいと思います。見せる物がいい。 ・ユーモアがあってとても面白かった！楽しかったです：D ・見せる物もわかりやすいからとてもいいです。 ・〇〇さんは本当にわかりやすいです。 ・写真はとてもわかりやすくいいと思います。説明も簡単にできました。 ・本物を皆に見せることはよかったです。 ・絵はとてもおもしろかったです。絵をみたらすぐわかります。 ・音楽を準備しておいてわかりやすかった。 ・原稿を見ないで上手な説明をした。絵と写真で説明してわかりやすかった。 ・すばらしい絵で説明したから、よくわかりました。 ・見せるものがいっぱいし、説明もわかりやすいし、とてもいいと思います。 ・〇〇さんすごいですね。一生懸命暗記したらしい。 ・資料は一生懸命作った！すごいです。描いた絵もとてもすごいと思います。 ・説明がとてもわかりやすく言葉も簡単にできましたから、本当にいいと思います。 ・長い説明聞いたらわかるようになった。 ・みんなのほうを見なかった。 ・もっと皆さんに向けて話せばよかったですと思います。 ・皆に向けて話す方がいいと思う。 ・緊張しすぎだ。 ・内容はもっと簡単に説明したほうがいいと思います。 ・使い方説明だけでなくやったらいいと思います。 ・もっと面白くやればいいと思います。でも内容が分かりやすかった。 ・自分で話だけ。 ・内容がいいけど、言葉が難しいと思います。説明する方がいいと思います。 ・質問によく答えられませんでした。 ・内容はちょっと少ない。もっと話したらいいと思います。
<p>テーマの物に関する言及</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・悪い運を破りたいから買いたいです。 ・自分の経験で話した。同じ経験があるから、懐かしい気持ちがいっぱいある。 ・帰国したとき、いっぱい買ったほうがいいと思う。 ・いい物と思います。 ・面白い物だと思います。

<p>テーマの物に関する言及</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国料理を食べたい気持ちが高くなった。 ・楽しそうけど、あぶない感じもある。 ・とっても楽しかった。韓国の中国・台湾料理店でよく見たもの。 ・体のために使った物？ ・きれいー！ワヤンを見に行きたい。 ・私の style ? ハハ ・私も知っています。かわいい～。 ・本当にいい匂いですね。 ・はじめてそんなものを見て、とてもおもしろかった。もし私は子供時この物を使ったら、大体背が高くなったことができた。ちょっと残念ですね～。 ・本当に便利な物だった。 ・前、そんな人形の番組見た。おもしろいね。 ・これ、見たことないから、とてもすてきなベッドと思います。 ・便利な伝統がわかった。 ・便利そうだ。 ・私も買いたいです。 ・おもしろかった。怖い映画を見たら、よく見た。 ・明日はダメ？本当に？？残念。 ・かわいいベッド。一度使ってみたいけど、できないかな。 ・かわい～見たことないです。 ・音楽が本当にきれいだ。 ・もし日期を決めることができない時、このカレンダーを使った方がいいと思う。 ・前テレビでゲルをみました。でも使い方は全然わかりません。今回〇〇さんの詳しい説明でよくわかりました。ありがとう。 ・楽器の音はいい音と思います。 ・ゲルは綺麗し時間も分かれるしいい物だと思います。 ・教科書で見たものだ。見て、一度住んでみたいと思った。 ・モンゴルのイメージは変わってきた。(都会の写真を見た。)
<p>何についてかよくわからないもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・短かったけど、いい。 ・おもしろかった。 ・中級らしいです。すごい。 ・だんだん上手になってるね。自信を持つようになった。 ・発達した。 ・前はよくなったと思っています。

6. アンケート結果

6-1. アンケート項目

1年の終わりに、コース評価とともに今回の活動や発表についてのアンケート調査を行った。質問項目は次の5つで、回答数は14だった。

質問1 「やってよかったと思う活動や発表について」

質問2 「よい発表のために必要だと思う力について」

質問3 「活動型の授業をする意味や問題点について」

質問4 「FBやりハーサルの必要性について」

質問5 「活動型の授業をして伸びたと思う力や、このような授業の必要性について」

以下、アンケートの結果について述べる。

6-2. やってよかったと思う活動や発表について

複数回答で、半数以上の学習者が「やってよかった」と答えたものは、

日本人にインタビューしよう／どちらの店のほうがいいですか／ちょっとこれを見てください／美術館・博物館へ行って報告する／流行語・若者言葉調べ／国のことわざ紹介／健康・便利グッズ／私の国のこんな物

であった。これらのうち「日本人にインタビューしよう／流行語・若者言葉調べ／国のことわざ紹介／健康・便利グッズ／私の国のこんな物」については、「大変だったが、やってよかったと答えた」学習者が数名いた。一方、学習者によっては苦手な活動があり「新聞を作るのは好きではない」と書いた学習者もいた。

6-3. よい発表のために必要だと思う力について

次のような11の項目を選択肢として提示し、複数回答で答えてもらったところ、次のようなものが上位になった。

いい発音 (11名) / ジェスチャーや表情をうまく使うこと (10名) / みんながよくわかるようにするためのアイデア (10名) / はっきりした、よく聞こえる声 (9名) / 絵・資料などを上手に見せる力 (9名) / 度胸 (9名)

以下、「正しい文法 (8名)」「上手な原稿を書くこと (8名)」「原稿を覚えること (7名)」「聞いている人へのサービス精神 (6名)」「みんなに伝えたいと思う気持ち (6名)」の順で続いた。

6-4. 活動型の授業をする意味や問題点について

活動型の授業をする意味について自由に記述してもらったところ、複数の学習者が、

教科書で習ったことを実際に使うことができる／人の前で話すことに自信がつく／実際に日本人と話す機会がある／自分が考えていなかったことを考える機会がある

を挙げた。他に、

日本のことがよくわかってきた／緊張しないで話せるようになる／発表する力はこれからの生活で役に立つと思う／みんながおもしろいと思うことが何かよくわかる／自分の意見や話の流れを考えて話せるようになる／みんなの発音を聞いて自分の間違いに気づく

という回答があった。一方、問題点については、「ない」と答えた学習者が全体の3分の1いた。問題点としては次のような回答があった。

グループの人は時々意見が違うから大変だ／時間がたくさんかかる。特に絵などの資料作りの時間はもったいない／使いたい文法をまだ勉強していないから言いたいことがうまく言えない／メインテキストの勉強をもっと進めたかった／人の前で話すとき緊張する／活動のための時間が足りない

また、なぜ教師が1年を通じてこのような活動や発表を多く取り入れたと思うかについては、

進学する専門学校での発表などの授業で役に立つように（3名）／応用のほうが大切／日本語の練習のため／教科書の勉強をするだけではなくて、日本人のように日本語が使えるように／留学生はみな寂しかったり文化の違いがあって大変だから、お互いに理解してあげたり励ましたり話をしたりすれば本当に力になる

という回答があった。

6-5. FBやリハーサルの必要性について

教師やクラスメートからのFBが「必要だ」と答えた学習者は10名であった。自由記述欄には理由として、

自分の欠点や苦手なところを知ることが必要だ（4名）／ほめられると自信がつく／いい所とよくない所がわかって、もっといい発表ができるようになる／発音や表現の間違いが学べる

が挙げられていた。一方、「先生のコメントは必要だが、クラスメートのコメントは本当のことが書いてあるかどうかかわからないような気がする」という意見もあった。FBが「必要ではない」と答えた学習者は3名で、「恥ずかしい」と書いた学生が1名いた。どのような点を恥ずかしいと感じるのかはわからない。

リハーサルの必要性については、

必要だ（10名）／必要ではない（4名）

であった。リハーサルを行ったのは、最後の2つの発表だけであったので、回数としては多くない。「リハーサルが必要だ」と答えた理由の自由記述欄には、

発表する時と同じ状況なので役に立つ／どこが足りないか、わかった／自分の説明がわかりやすいかがわかる／ペアでのリハーサルでは足りないのもっとたくさんの人としたい

という回答があった。「必要ではない」の理由としては

リハーサルを見てしまうと、本番の時サプライズがない

という回答が1名から出た。

6-6. 活動や発表の授業をして伸びたと思う力や、このような授業の必要性について

「伸びたと思う力、成長したと思うこと」についての自由記述欄には、

自信がついた／説明する力、話す力がついた

という回答が7名の学習者からあり、他に

異文化を受け入れることができるようになった／自分の細かい動きなどに気付いた
／文法、作文、発音の力がついた

という回答があった。

「活動や発表の授業の必要性」については、ほとんどの学習者が「必要だ」と答え、その理由としては、

語学は文法や漢字より、実際に生活の中で使うことが大切だから／日本語は実際に使わなくては上手にならないから／発表をすると自信がつくし、日本語で話したい気持ちが出てくるから／会話力がつくから／仕事でも進学先でもいろいろな場面があるからやっておいたほうがいい／いろいろなテーマでしなくてはならないので、いろいろな言葉が覚えられるから／文法をどこで使うかわかるから／もしこのような授業がなかったら、日本語が今より上手にならなかったから

という回答があった。1名だけ「必要だが多すぎる」という回答があったが、これは「活動や発表の授業よりも、メインテキストの文型の授業のほうが好きだから」という理由であった。

7. 考察

7-1. 活動型の授業を円滑に行うための環境づくりの必要性

このような活動型の授業を、1年を通じてメインテキスト以外のもう一つの「軸」として学習者に意識させ円滑に行っていくためには、教師がカリキュラムを工夫するだけではなく、学習者全体の中に互いの発表や活動がしやすい環境を少しずつ作り、それを土壌としていくことが大切であろう。このような環境づくりが必要であると考えるのは、次のような理由からである。すなわち、①グループで行う活動の場合は、協力し合わなくてはならない。②のびのびと安心して発表するためには、自分の発表が聞き手に受け入れてもらえるという安心感が必要である。③発表は発表者だけで成り立つものではない。聞き手が発表者の話す内容に関心を持ち、理解しようという気持ちを持つことが必要である。④教師の指示や評価によって動くのではなく、学習者同士のインタラクションがあることこそが「伝わった」という喜びになり向上への動機づけとなる、と考えるからである。

このような土壌を作っていくために今回のクラスでは、早い段階でクラスメートにインタビューして互いを紹介する「〇〇さんをご紹介します」や、自分が大切にしている物を紹

介する「ちょっとこれを見てください」など、学習者同士が互いを知り合うことができるような活動型の授業を行った。また、活動型の授業に直接関係のない「会話」や「作文」などの授業でも、普段からいろいろ小さな工夫をすることにした。例えば、①『日本語だけで5分会話』の授業を初級のカリキュラムに組み込み、その授業時間に提示されたテーマ（例：電話、買い物、ペット）について、毎回相手を変えて話し、クラスの誰とでも気軽に話せるような雰囲気を作る。②短作文などのF Bの時に、よい文をそれを書いた学習者の名前とともに紹介する。③授業中に書いた長作文はクラス全体やグループで発表する、回し読みをするなどし、単なる作文として以上の役割を持たせ、クラスメートの現在の姿からは直接見えていない部分（例えば国の家族や育ったところなど）を互いに知り合う機会を作るようにする。④中級からは短いニュースや投書を読んで意見を言い合う「読んで話そう」の授業で毎回、話す相手を変えて意見を言い合い、誰とでも自分の考えを言い合えるようにする、などである。このような小さな積み重ねを通じて、学習者同士が早い段階で互いのことを知り合い、クラスメートの優れた部分や自分とは違う部分を発見し、不必要な緊張感なしに自分の言いたいことを話すと同時に、相手を受け入れ何でも話せる雰囲気がクラス全体にできあがっていった。

7-2. 活動型の授業を継続的に行うこと

今回行った活動型の授業は、初級段階の簡単なものから始め、徐々に自由度の高いものへと段階を踏むように計画した。初めのうちはインタビュー、あいづち、お礼、発表などの言語形式の指導も細かく行ったが、回数を重ねていくうちに、それらの言語形式の指導は必要なくなり、教師は学習者自身が伝えたいと思っていることを表現する手伝いの役目に徹することができるようになった。

活動や発表の後には、内容によって教師からのF B、クラスメートからのF B、学習者自身による振り返りを行った。自分の経験を積み重ねることや他の学習者から学ぶことによって、次の活動や発表の向上につながるように心がけた。また、このF Bは「正確さ」以外の角度からも行い、文法力が弱い学習者でもいい発表をすることは可能であることを意識してほしいと考えた。

また、それぞれの活動型の授業が日本語力獲得の一連の大きな流れの中にあり、1つの目標に向かっていることを機会をとらえてさりげなく学習者に意識させるために、4-2.で触れたように、1つのメインテキストが終わる頃に、それまでに行った活動型の授業について簡単にまとめたプリントを作って学習者とともに振り返り、学習者に自分自身の成長を感じてもらおうようにした。教師はただ単に事実を示すだけでなく、学習者が以前はできなかったが今はできるようになったことに触れてそれをほめ、学習者に自信を持ってもらうよう努めた。同時に、今後計画している活動型の授業についても簡単に触れ、今後の学習に向けての教師の期待も伝え、動機づけとした。

今回の一連の活動型の授業の実施を通して、「テストでよい点が取れない学習者であっても、すばらしい発表ができる」場面に何回も遭遇した。特に、最後に行った2つの授業「健

康・便利グッズ」と「私の国のこんな物」は自由度の高いものだったが、私たち教師の期待以上の内容だった。聞き手にわかりやすく伝えたい、より具体的に伝えたい、楽しく聞いてもらいたい、などのことを実現するために、教師も予想していなかった様々な工夫（クラスメートと協力して寸劇を演じながら発表する、模型を作ってきて実演しながら説明する、BGMや音楽を準備して楽しんでもらうなど）が随所に見られた。同時に、文法力が高く正しい原稿を書いているだけではよい発表はできないということも観察された。このことから、活動型の授業は中級レベルになってからスタートするというのではなく、初級の段階から体験させ、その中で必要なスキルを身につけていくことが必要ではないかと考える。

このように1年を通して継続的に活動型の授業を行った結果、授業に関わった教師は学習者の多くが積極的に取り組みながら成長していったという印象を持っているが、アンケートの結果から、学習者もおおむね肯定的な評価をしていたことがわかる。「活動型の授業をする意味や問題点について（6-4.）」、「活動や発表の授業をして伸びたと思う力や、このような授業の必要性について（6-6.）」の回答を見てみると、進学先の授業で役に立つから必要だという現実的な理由もあるが、「自分の意見や話の流れを考えて話せるようになる」「語学は文法や漢字より、実際に生活の中で使うことが大切だから」「発表をすると自信がつくし、日本語で話したい気持ちが出てくるから」「日本語は実際に使わなくては上手にならないから」「緊張しないで話せるようになる」「会話力がつくから」「もしこのような授業がなかったら、日本語が今より上手にならなかったから」など、この授業が自分の日本語力の向上に役に立つから必要だと捉えていた学習者が複数いたことがわかる。何を指して「上手になる」「話せるようになる」と言えるのかは、非常に難しい問題だ。しかし、学習者自身が「話せた」という実感を持っているということは重要なことではないだろうか。語学力というのはテストや何らかの数字で測れるものだけなのだろうか。他の人と日本語でインタラクションができ、他の人の日本語での発表を楽しむことができ、日本語で自分の言いたいことを伝えることができるということも、すべて大きな日本語力の一部と考えられないだろうか。この授業を通して学習者が「上手になった」という実感や自信を持ったということは、日本語学習上の効果があったと言えないだろうか。現在本校では、学習者の日本語力の成績評価はテストで行うことが当たり前になっているが、活動型の授業をカリキュラムに取り入れていくなれば、テスト以外の評価方法も考えていかななくてはならないのではないかと思う。

7-3. スケジュール作成上の難しさ

カリキュラムの中にメインテキスト以外の「軸」を意識してスケジュールを組むという当初の目標は、4-2.の表1にまとめた通りほぼ達成することができた。発表を数回に分けて行ったものもあり、活動型の授業のために何時間使ったかを正確に言うことはできないが、すべてを合計して50コマ程度を使った。このうち、メインテキストに直接関連した活動型の授業は25コマ程度であった。実施した活動型の授業は簡単なものから始め、自由

度の高いものへと段階を踏んで進んだ。9月のアチーブメントテストの結果、学生移動があり、対象クラスにも新しい学習者が加わるなどして、4月から在籍するメンバーがクラスの約半分になったが、活動型の授業を行っていくという方針は変えずに、引き続き1ヶ月に1つ程度のペースで継続的にカリキュラムに組み入れた。

全体としては、このように当初の目標を達することができたものの、これらの授業を実際にスケジュールに組み込んでいく際の難しさはやはり存在する。本校のカリキュラムにおける自由に裁量できる授業の時間的制約、そして授業体制の特性による難しさである。

今回のクラスのように比較的カリキュラムを組む際の自由度が高いクラスであっても時間的な制約はやはり大きかった。そのため、「適度な間隔で活動型の授業が1年を通じて行われるように計画する」のは簡単なことではなかった。すなわち、メインテキストに関連した活動と重ならないように適度な間隔を空けながら、ある程度の重さの活動型の授業や小さい活動型の授業をバランスよく組み入れることの難しさである。通常、活動型の授業では、「教師がその活動の目的などを導入後、言語形式やモデルを紹介し、その後、学習者がインタビューや調査を行い、発表のための準備をし、最後に発表をする」という流れがあるが、このような形の授業は数日、場合によっては2～3週にわたって少しずつ続く。メインテキストと関連して行う活動型の授業は、どのレベルでもほぼ必ず行うものであるため、これらはメインテキストの進度に合わせてスケジュールに組み込んでいかななくてはならない。今回はそれ以外に適度な間隔を空けて活動型の授業をスケジュールに組み込む必要上、4月当初から年間を見通して綿密に計画を立ててスケジュールを組んでいったが、よほど工夫しないと1つの活動の発表の時期と、次の活動の導入の時期が重なる、などということが起きてしまう。このようなことを避けるために最後のほうの1月、2月の時期には発表の準備を宿題にせざるを得なくなった。この時期までに学習者たちのほとんどは、一連の活動型の授業や発表に意義を見出して、各自が時間を作り自主的に準備をするようになっていたが、学習者によっては負担が大きかったかもしれないと考える。

また、本校の授業体制による難しさもある。本校では1コマごとに教師が替わるという授業体制を取っており、2011年度5組の場合、4月から9月までは5名、10月から3月までは7名の教師が授業に入った。活動型の授業では、それぞれのテーマの中での連続性も必要なので、1つの活動型の授業にあまりにも多くの教師が関わることは、前の授業内容や学習者の様子についての引継ぎなどが難しくなり、学習者にとっても好ましいとは言えない。そのため、あるテーマの活動型の授業を行う際は、それぞれをなるべく2名程度の教師が関わるようにスケジュールを組むなどの工夫が必要であったが、これは相当難しいことであった。

8. おわりに

今回の実践を通して学習者の成長を目の当たりにしたことにより、私たち教師が学習者を見る目も変わったと感じる。おそらく、教室で行われるメインテキストの授業やテストの結果から見るのとは全く違う角度から、学習者を見ることができるようになったのではないかと思う。教師主導の授業ではなかなか知ることのできない学習者の様々な面、例えば、日本語以外の知識、これまでの人生経験、家族への愛情、演技力、自分の国のことを知ってもらいたいと思う気持ちなどを強く感じることができた。これは学習者も同じであっただろう。学習者同士も、クラスメートが持っている日本語力以外のすばらしさや持ち味に触れたり、異文化に触れたりする中で、互いにそれを認め合うようになっていく様子が観察された。そして、学習者の中にはグループでの活動、互いの発表などを通して、よりよいものを目指していきたいという主体性が大きく育ったように思う。アンケートでは、「みんながおもしろいと思うことが何かよくわかる」「留学生はみな寂しかったり文化の違いがあって大変だから、お互いに理解してあげたり励ましたり話をしたりすれば本当に力になる」「自分が考えていなかったことを考える機会がある」など、活動型の授業の価値を日本語力向上以外の面からも見出してはっきりと記述した学習者もいる。私たちは活動型の授業の場が実際のコミュニケーションの場になってほしいと期待していたが、実際に学習者がこのように考えていたことがわかって、非常にうれしい気持ちになった。

日本語学校で活動型の授業を実際に行うためには、乗り越えなくてはならない課題は多く、教師も学習者も大きなエネルギーが必要だ。しかし、活動型の授業を通して得られる喜びや驚きや発見の中にはメインテキスト中心の授業では得られないものもある。私たちはこれからもこのような授業の可能性を探って行きたいと思う。もちろん、このような授業がすべての学習者にすぐに受け入れられるとは限らない。今回のクラスでも文法力こそが大切という強いビリーフを持っている学習者が1名おり、その学習者の気持ちは最後まで変わらなかったようだ。活動型の授業の意義を教師と学習者が共有していくことも今後の課題である。授業は教師だけが作るものではなく、学習者と教師が一緒になって作っていくものだという気持ちを大切にしながら、これからもよりよい授業を考えていきたい。

注

- (1) 『文化初級日本語Ⅰ テキスト 改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト 改訂版』は、2013年8月に出版されたものである。これ以前は、『新文化初級日本語Ⅰ』『新文化初級日本語Ⅱ』が初級のメインテキストとして使用されていた。
- (2) 本校がある学園内には、文化学園大学、文化服装学院、文化ファッション大学院大学があるので、本校の学習者たちは日本人学生にインタビューしやすい環境にある。

参考文献

- (1) 岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』凡人社
- (2) バルダン田中幸子・猪狩保子・工藤節子（1988）『コミュニケーション重視の学習活動1 プロジェクト・ワーク』凡人社
- (3) 杉山純子・野原美和子・藤江希子・宮谷敦美（2003）「初級レベルにおける統合型言語教育に関する一考察—Peer feedback を取り入れた発表プロジェクト—」『岐阜大学留学生センター紀要 2002』岐阜大学留学生センター
- (4) 岸真由美（2007）「初級日本語学習者対象のプロジェクトワークの効果--実施結果に基づく考察」『日本語教育論集(16)』姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育コース
- (5) 三浦香苗（1998）「初級段階の口頭発表プロジェクト—受信から発信へ—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- (6) 金城尚美（1994）「四技能を統合した日本語教授法—プロジェクトワーク—」『言語文化研究紀要：Scripsimus（3）』琉球大学教養部

資料		
テーマ	所要時間	時期
授業の流れ T：教師がすること S：学習者がすること ＊コメント、学習者の様子など		
日本人にインタビューしよう	4コマ	4月18日～4月23日
S：3人程度のグループを作り、学園内の日本人学生にインタビューしたい質問を考える→T：インタビューの質問以外の部分、質問の切り出しやあいづちなどを指導する→S：インタビューに行く→T：発表の言語形式を指導する→S：発表の準備をする（話す内容や見せる資料など）→S：グループごとに発表する→T：発表に対するコメントをする→T：資料は教室に掲示する ＊日本人と話す、発表するなど何もかも初めてで心配そうな学習者もいたが、インタビュー後は学習者が日本語で話したという達成感を持っていると感じられた。		
〇〇さんを紹介します	2コマ+発表5回	5月10日～5月23日
T：教師が他の教師を紹介するモデルの発表をする→S：クラスメートとペアになって、趣味や好きな食べ物などについて相手にインタビューをする→S：インタビューをもとに、相手の紹介文を書く→T：原稿をチェックする→S：発表の準備（絵や文字情報など）をする→S：一人ずつ発表をする ＊クラスメートを互いによく知る機会にもなり、聞くほうも楽しい発表であった。		
どちらの店のほうがいいですか	4.5コマ+ 調査は宿題	5月25日～6月1日
T：学習者がよく行く店についての事前調査を行い、それに基づいて3人程度のグループを作り、グループごとに「デパート」「コンビニ」など調べる店を決めておく→S：グループ内で話し合い、「デパートAとデパートB」「電気店Cと電気店D」「コンビニEとコンビニF」などと実際に行く店を決め、調査項目を決める→S：実際にその店に行き、インタビューしたり、店内を見たりしながら調査する（宿題）→S：発表の準備をする（話す内容や見せる資料など）→S：グループごとに発表する→T：発表に対するコメントをする→T：学習者が作った発表用の資料を教室に掲示する ＊グラフや図、絵などを多用し、4月当初に行った「日本人にインタビューしよう」に比べ、よりわかりやすい発表ができるようになった。		
ちょっとこれを見てください (3分間スピーチ)	0.5コマ+ 発表4回	6月15日～7月1日
T：自分の大切にしている物、毎日使っている便利な物などの実物を見せてモデルの発表をする→S：実際に教室に持ってこられる物で大切にしている物や便利な物の中から何を紹介するかを決め、原稿を書く（宿題）→T：原稿をチェックする→S：各自自主練習をする→S：実物を持ってきて発表する		

<p>*子供の時からずっと使っていて留学の際も持ってきたタオルケットや、国から持ってきた炊飯器など各自が様々な物を持ってきて、それにまつわる思い出や大切にしている理由などを話した。各自が大切にしている物が何かを知ることができ、学習者相互の理解が深まった。</p>		
街の中の敬語調べ	2コマ	9月14日・9月22日
<p>T：街の中で見聞きする敬語を絵と文字を用いて1つ紹介し、モデルの発表をする。その後どの学習者がどこで敬語を調べてくるか（デパート、電車内…）重ならないように調整する→S：放課後や週末を利用して、街の中で見聞きする敬語を1つ調べる→S：発表の準備（絵や文字情報など）をし、発表をする</p> <p>*『文化中級日本語Ⅰ』第2課のテーマである「敬語」を身近に体験するのに役立った。発表した資料は文化祭で展示した。</p>		
クラス内スピーチ発表会	8コマ	9月16日～10月8日
<p>T：過去のスピーチ大会のスピーチから1つをモデルとして見せる。その後、スピーチの構成や言語形式などを指導し、テーマを考え、構成メモを書いてくることを宿題にする→S：構成メモにしたがって、原稿を書く→T：チェック→S：清書する→S：各自練習をする→S：クラス内で発表する→T：聞き手の学習者には感想などのコメント用紙を配布する→T：学習者の投票により、文化祭で発表するクラス代表を決定する→T：コメントを各学習者に返却する</p> <p>*話し方にも意識しながら発表できた学習者が多かった。スピーチの内容そのものは、日本語力による差が大きかった。</p>		
美術館・博物館へ行って報告する	5コマ	10月27日～11月11日
<p>S：自分が興味のある美術館や博物館をインターネットで調べる→S：あらかじめ教師が作っておいたグループになり、その情報を持ち寄ってグループの他のメンバーに報告する。その後、グループ内で相談して行き先を1つ決める→S：見学に行く。その際、見学した内容はメモをしておく→S：一緒に行ったグループのメンバーで情報を共有しなおす→S：新しいグループを作り、そのメンバーに見学した内容や感想などを伝える報告会を行う</p> <p>*『文化中級日本語Ⅰ』第7課の「調べて報告しよう」から発展させた自主教材の1つである。この活動全体が、私たち日本人が美術館・博物館などを見学する時に行う行為を実際になぞったものなので、学習者も楽しんで行うことができた。報告会では、見学のメモを使い、美術館・博物館のチラシ、グループで行った時の写真などを見せながら、難しい内容も工夫して聞き手に話していた。新しく作ったグループの学習者すべてにインフォメーションギャップがあるので、報告会は意味のあるものになり、聞き手の学習者からもいろいろな質問が出た。</p>		
こんなニュースがありました	3.5コマ	12月6日～12月12日
<p>T：ユーモアのある「うそのニュース」を作り、アナウンサーになったつもりでモデルの発表をする→S：原稿を書く→T：チェックする→S：清書し、各自上手に読む練習をする→S：一人ずつ前に出てアナウンサーのように読む→T：録画する→S：後日、自分の発表を録画したのを見て自己FBをする</p>		

<p>* 『文化中級日本語Ⅱ』の第1課の「書いてみよう」から発展させた自主教材の1つである。発表そのものにはすでにかなり慣れていたが、録画するのは初めてだったので緊張した学習者もいた。後日、自分の発表の録画を見ることで、客観的に自分の発表を捉えるよい機会になった。</p>		
流行語・若者言葉調べ	1.5コマ+調査 発表5回	12月6日~12月13日
<p>T：事前準備としてよく耳にする言葉をあらかじめ探しておく→T：「メーリス」という言葉で、モデルの発表をする。目的、流れなどを説明し、今回はすべて自分の力で発表まですることを説明する→S：インタビューして調べる言葉を決める→S：インタビューに行く→S：発表の準備をする（宿題）→S：一人5分程度、5回に分けて発表する→S：自分の発表の振り返りおよび発表者へのFBをする</p> <p>* インタビューの指導、原稿のチェック、発表のための指導、発表の形式の指導などは全く行わずに、すべてを学習者自身の力で行わせ、発表をさせた。導入から発表まで短期間であったにもかかわらず、これ以前に行ってきたいろいろな活動の中で養ってきた力を使って取り組んでいた。わかりやすくよい発表ができた学習者が多かったが、うまくできなかった学習者もいた。失敗を通して次のステップに進むことも目的の一つであった。</p>		
日本人へのインタビューと壁新聞作り	7コマ+ インタビューは宿題	12月8日~1月20日
<p>T：事前準備として、学習者の知り合いの日本人でインタビューに応じてくれる人を探すよう指示する→T：メインテキストの指導の流れにしたがって、インタビューの言語形式、あいづちなどを指導する→S：3~4人のグループになり、インタビューしたい内容を考える→S：インタビューに行く（宿題）→S：グループごとにインタビューのまとめをする→S：壁新聞の形に仕上げる→教室に掲示する</p> <p>* 『文化中級日本語Ⅱ』第1課の活動「この人に聞いてみました」に沿った内容である。仕事をしている日本人の知り合いにインタビューしたグループもいくつかあり、仕事のことや趣味のこと、休日の過ごし方など聞き、ふだん教室ではじかに知ることのできない日本人の姿について知ることができたことは大きな収穫だったようだ。</p>		
国のことわざ紹介	4コマ	1月27日~2月3日
<p>T：先輩の学習者が作った「国のことわざ」紹介の絵や文字情報などを見せる→S：メインテキストの指導の流れにしたがって、ことわざを紹介する作文を書く→T：原稿をチェックする→S：清書し、発表に使う絵や文字情報を準備する→S：前に出て一人ずつ発表する</p> <p>* 『文化中級日本語Ⅱ』第3課の作文「ことわざあれこれ」の発展としての活動である。この発表では、絵がかなり大きな意味を持つため、絵の苦手な学習者が絵の得意な学習者の助けを借りるなどの様子も見られた。</p>		

健康・便利グッズ	4コマ	2月1日～2月13日
<p>T：教師が自分で使っている健康グッズを持ってきて、使い方、効能、値段、お勧めのポイントなどを入れて発表する→S：自分で紹介したいと思う物を決め、メモを書いてくる→T：原稿の書き方について指導する（作文ではなく、紹介文としてわかりやすい書き方とはどのようなものか。難しい言葉の言い換えのし方、話の流れに沿って見せる絵や文字情報、実物なども記入していくことなど）→S：発表をイメージしながら、原稿を書く→T：発表用原稿をチェックする→S：各自、発表の練習と準備をする→S：ペアでリハーサルし、アドバイスし合う→S：一人ずつ発表する→S：自分の発表について振り返った後、クラスメートの発表を聞いて一番使ってみたいと思った物を投票して、上位の発表を表彰する</p> <p>*最後の「私の国のこんな物」の発表を意識し、発表用原稿の書き方の指導をていねいに行った。学習者は発表をイメージしながら準備物を考え、原稿を書く練習ができた。発表では「入浴剤」「手首式血圧計」「首マッサージ機」「ニコチンガム」「ポータブルスキャナー」「ナップヴァイープ」など様々なものが紹介された。「手首式血圧計」の発表では実物を持ってきてクラスメートを巻き込んで実際に血圧を測って場を湧かせた。また、「ナップヴァイープ」の発表では実物はないものの自分が居眠りをしている写真を加工して使い方を説明するなど、随所にそれぞれの学習者の工夫が見られ、楽しく内容のある発表になった。</p>		
私の国のこんな物	7コマ	2月15日～2月24日
<p>T：教師が「こたつ」でモデルの発表をする。紙などで模型を作り、こたつの仕組みや使い方、思い出などを交えて紹介した→S：それぞれの学習者が自分の国の物で紹介したい物を決める→S：発表をイメージしながら原稿を書く→T：原稿をチェックする→S：清書し、発表に使う絵や写真、文字情報、模型などを準備する→S：ペアでリハーサルをし、アドバイスし合う→S：一人ずつ発表して録画する→S：録画した映像を各自が見て、自分の発表を振り返る</p> <p>*「春聯」「ワヤン」「破邪符」「ポテギ」「ゲル」「ベシック」「ザントクテ」など、他の国の学習者が知らない様々なものが紹介された。「ワヤン」の紹介では模型を作ってスクリーンで影絵を演じる、「春聯」の発表ではクラスメートの協力を得てその使い方を寸劇仕立てにする、「アングルン」の発表では You Tube でその音を聞かせるなど、教師の予想を超えたすばらしい工夫があちこちに見られた。実物や模型を準備しなかった学習者も、写真や絵、文字情報など上手に使っており、全体として非常に魅力的な発表であった。</p>		